

利根川下流の水塚について

阿由葉 司

一 はじめに

利根川流域には、屋敷地の一部を土盛りして洪水時⁽¹⁾の避難用の建物等を構築した「水塚」⁽²⁾が残されている。それは、利根川流域の低湿地帯の地域的特性を極めてよく示しているものである。

利根川流域地域は、利根川から多くの恩恵を得てきたと同時に、利根川の洪水等によりたびたび甚大な損亡を被ってきたこともまた事実である。近世初頭の利根川東遷以降、利根川流域の歴史は、利根川治水の歴史でもあった⁽³⁾。

本稿は、これまでふれられることの少なかった利根川下流の水塚について、筆者が先年その調査の機会に恵まれた千葉県印旛郡栄町（栄町の位置は図1）の水塚分布を紹介するとともに、水塚を通して利根川下流低湿地の地域的特性を考えてみたい。

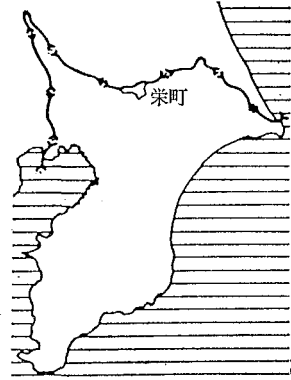


図1 栄町位置図

二 利根川の水塚をめぐる研究

利根川流域の水塚についての研究をふりかえってみると、利根川中流域について、つとに佐藤甚次郎⁽⁴⁾の研究がある。

佐藤のものは、埼玉県北埼玉郡北川辺町（佐藤の調査の時点では北川辺村、一九七一年に町制施行）における調査を素材にしたものである。それは、北川辺町周辺が利根川流域のなかでも、関東造盆地運動の中心に位置し、典型的な景観、様相を示していたからであろう。

洪水常習地域であり、水塚密集地域として、その後の、伊藤安男⁽⁵⁾、中田栄一⁽⁶⁾、大熊孝⁽⁷⁾、横山秀司⁽⁸⁾なども、主たる対象地域は北川辺町周辺であった。また、北川辺町に隣接する群馬県邑楽郡板倉町では、町史編さん事業の一環として、板倉町とその周辺の群馬県、栃木県、埼玉県、茨城県にまたがる一五の市町村における詳細な分布調査がなされ、すぐれた報告⁽⁹⁾が公にされることになった。このような既往の成果により、利根川の中流域についてはほぼその分布の状況が把握されるようになってきている。

ところが、こうした水塚は利根川中流域のみならず、関宿から下流の利根川流域にも残存していることは、印旛沼周辺についての川上健三⁽¹⁰⁾の報告をはじめとして、比較的早くから知られてきた。しかし、残念なことにこれまで網羅的な調査がなされたことはなかったようで、その分布については断片的な報告を聞くのみであった⁽¹¹⁾。

なお、関東地方においては、利根川流域の水塚と同形態のものが荒川流域にもみとめられる。荒川流域の水塚につ

いては、佐藤甚次郎・佐々木史郎・大羅陽一⁽¹²⁾による研究があるとともに、籠瀬良明⁽¹³⁾も関説している。

三 千葉県印旛郡栄町の水塚

(1) 利根川下流の水塚

利根川下流部について、現在までに水塚が確認されている市町村は、筆者が実見したもので、

・千葉県分

我孫子市、白井町、印西町、栄町、本埜村、佐倉市⁽¹⁴⁾、佐原市⁽¹⁵⁾

・茨城県分

岩井市、取手市、竜ヶ崎市、藤代町、利根町、総和町、河内村、新利根村

があげられる。

このほかの地域でも残存している可能性があると思われるが、例えば佐原市以下の利根川の下流部で、顕著な形で確認できないことなどは、地形等の関連から、下流部の洪水のあり方が微妙に変わっていたためと考えられる。

このことは、小室栄一⁽¹⁶⁾が、佐原市周辺地域において、「囲い」を築堤して地区ごとに洪水を防御したことを明らかにしたことなどに示されている。

利根川の下流部にあつて、水塚がより顕著なのは、利根川と印旛沼にはさまれた千葉県栄町、本埜村周辺である。

(2) 栄町の水塚

千葉県印旛郡栄町は、昭和三〇年に旧布鎌村と旧安食町が合併した町であり、栄町における水塚は、同町の布鎌地

一 覽 表

番号	水 塚	所 在 地	保 存 状 態	備 考
37	飯 島氏宅水塚	和田450	塚完存	
38	稻 葉氏宅水塚	和田441	塚(一部消滅)	
39	岡 戸氏宅水塚	和田436	塚(一部消滅)	
40	川 島氏宅水塚	曾根96	塚完存	
41	長 沢氏宅水塚	曾根75	塚(一部消滅)	
42	尾 花氏宅水塚	布鎌酒直241	塚(一部消滅)	
43	石 井氏宅水塚	南192	塚完存	
44	石 井氏宅水塚	南156	塚, 屋敷完存	櫓有り
45	大 竹氏宅水塚	南102	塚完存	
64	赤 荻氏宅水塚	南87	塚, 屋敷完存	
47	大 木氏宅水塚	和田452	塚完存	
48	大久保氏宅水塚	長門谷53	塚完存	
49	奈 良氏宅水塚	四箇75-1	塚完存	
50	塩 田氏宅水塚	脇川23	塚, 屋敷完存	
51	鈴 木氏宅水塚	布鎌酒直125	塚, 屋敷完存	
52	新 海氏宅水塚	四谷31	塚, 屋敷完存	舟有り
53	小 林氏宅水塚	長門谷98	塚(一部消滅)	
54	斎 藤氏宅水塚	布鎌酒直30	塚(一部消滅)	舟有り
55	鈴 木氏宅水塚	布鎌酒直103	塚(一部消滅)	
56	斎 藤氏宅水塚	布鎌酒直96-ウチ-2-2	塚, 屋敷完存	舟有り
57	大 塚氏宅水塚	北754	塚, 屋敷完存	
58	大 塚氏宅水塚	北738	塚, 屋敷完存	
59	岡 島氏宅水塚	押付36	塚(一部消滅)	
60	小 野氏宅水塚	南49	塚(一部消滅)	
61	浮 島氏宅水塚	須賀新田1964	塚, 屋敷完存	
62	杉 田氏宅水塚	須賀新田1978	塚, 屋敷完存	
63	旧芳沢氏宅水塚	請方	塚完存	廃 屋
64	旧山口氏宅水塚	布太	塚完存	廃 屋
65	埜 崎氏宅水塚	曾根246	塚完存	
66	小 島氏宅水塚	中谷34	塚(一部消滅)	
67	大 塚氏宅水塚	北444	塚完存	舟有り
68	大 塚氏宅水塚	北442	塚(一部消滅)	
69	高 塚氏宅水塚	北869	塚(一部消滅)	
70	高 塚氏宅水塚	北370	塚完存	
71	鈴 木氏宅水塚	押付47	塚完存	
72	石 井氏宅水塚	南159	塚(一部消滅)	

表 1 水 塚

番号	水 塚	所 在 地	保存状態	備 考
1	小 島氏宅水塚	布太260	塚 (一部消滅)	
2	高 瀬氏宅水塚	布太254	塚完存	
3	長 沢氏宅水塚	布太297	塚完存	
4	芳 沢氏宅水塚	布太174	塚 (一部消滅)	
5	今 井氏宅水塚	布太163	塚 (一部消滅)	
6	今 井氏宅水塚	布太145	塚 (一部消滅)	
7	今 井氏宅水塚	布太146	塚 (一部消滅)	
8	芳 沢氏宅水塚	三和87	塚完存	
9	田 代氏宅水塚	布太37	塚, 屋敷完存	
10	玉 野氏宅水塚	三和184	塚 (一部消滅)	
11	長 沢氏宅水塚	三和305	塚 (一部消滅)	
12	桑 原氏宅水塚	三和306	塚 (一部消滅)	
13	長 沢氏宅水塚	請方327	塚, 屋敷完存	
14	鈴 木氏宅水塚	請方363	塚 (一部消滅)	
15	石 上氏宅水塚	請方407	塚 (一部消滅)	
16	長 沢氏宅水塚	請方397	塚 (一部消滅)	
17	長 沢氏宅水塚	請方397—2	塚完存	
18	芳 沢氏宅水塚	請方207—2	塚, 屋敷完存	
19	山 口氏宅水塚	請方231	塚 (一部消滅)	
20	野 村氏宅水塚	請方267	塚完存	
21	長 沢氏宅水塚	請方292	塚完存	
22	青 木氏宅水塚	請方142	塚完存	
23	芳 沢氏宅水塚	請方132	塚 (一部消滅)	
24	十二村氏宅水塚	請方115	塚, 屋敷完存	
25	鈴 木氏宅水塚	請方668	塚 (一部消滅)	
26	川 島氏宅水塚	請方635	塚完存	
27	鈴 木氏宅水塚	請方610	塚完存	
28	芳 沢氏宅水塚	請方548	塚, 屋敷完存	
29	野 寄氏宅水塚	請方519	塚 (一部消滅)	
30	小 島氏宅水塚	布太292	塚, 屋敷完存	舟有り
31	川 島氏宅水塚	曾根 1	塚, 屋敷完存	
32	川 島氏宅水塚	曾根10	塚, 屋敷完存	
33	川 島氏宅水塚	曾根26	塚 (一部消滅)	
34	野 中氏宅水塚	曾根27	塚 (一部消滅)	
35	大 木氏宅水塚	布鎌酒直272	塚 (一部消滅)	
36	飯 島氏宅水塚	和田453	塚 (一部消滅)	

茨 城 県

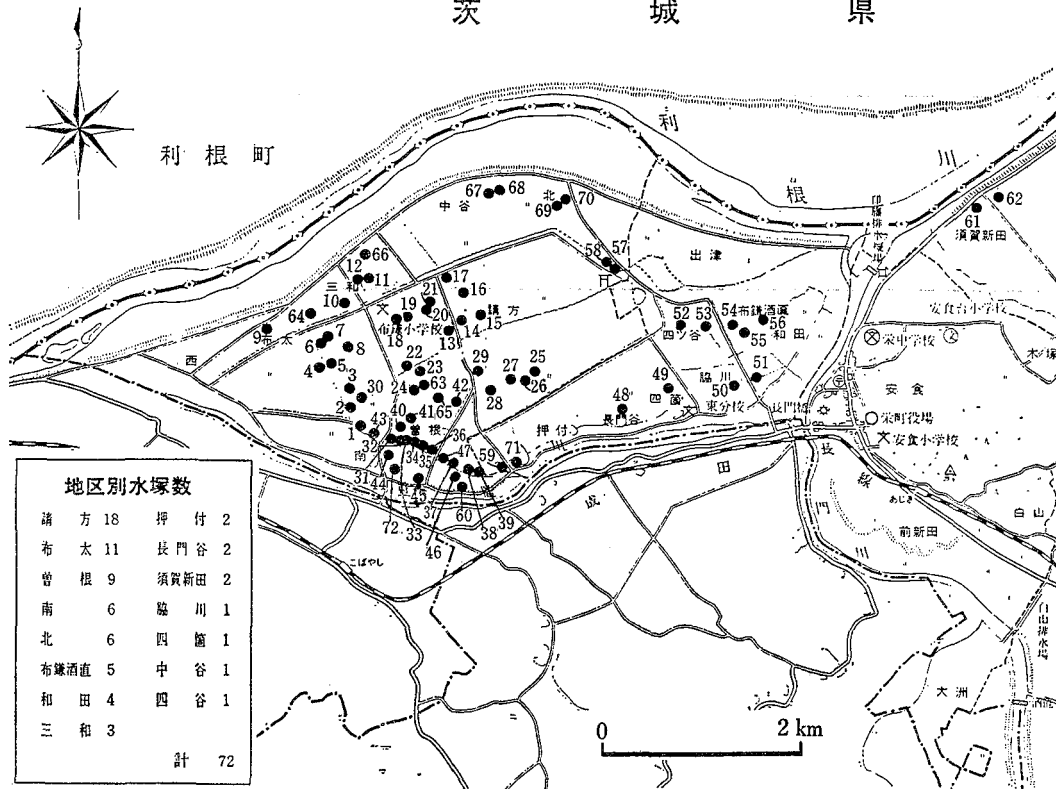


図 2 栄町水塚分布図

区に集中して残っている。

近年、栄町をはじめ周辺地域は、千葉県北部のなかでも、都市化の進展、生活構造の変化がきわめてはげしい地域であり、利根川の河川改修、水防体制の強化とあいまって、水塚が減少しつつある状況がある。そうした中で分布を調査したところ、布鎌地区に七〇、安食地区の須賀新田に二と、合計七十二の水塚を確認でき、比較的狭い範囲に相当数が残存していることが判明した。

栄町における水塚の現存状況は、表1—栄町水塚一覧表と、図2—栄町水塚分布図に示した通りである。

分布については、請方、布太、曾根といった地区に高い密度で分布している。これらの中で、請方、布太などは輪中中央部のより低湿部に位置するため、水塚のような土盛りした洪水避難施設がどうしても必要だったのである(18)。

(3) 布鎌の新田開発

布鎌は、現利根川、長門川、将監川に囲まれた輪中地帯で(図3—地形分類図)、完全な近世の新田村落である。

布鎌は、利根川下流の新田開発研究の中で菊地利夫(19)、須田茂(20)らにより、早くから取り上げられてきており、それに関連した研究は多い。

布鎌については、その開発以前の状況について、『千葉県印旛郡誌』(21)は次のように記している。

大瀬野と称せり(中略)高処と雖葦葎雑草に過ぎざるの地にして河水少しく増せば忽ち水底に没す安食酒直等の草刈場と称して同地方民の常に草刈に出入せし所なれども西部は相馬郡布川村民の草刈に出入りせしもの少なからざりし然れども未だ移住者はあらざりき

菊地、須田らによる布鎌の新田開発の状況をみると、明暦二年(一六五六)利根川南岸の諸村からの出作で、南新

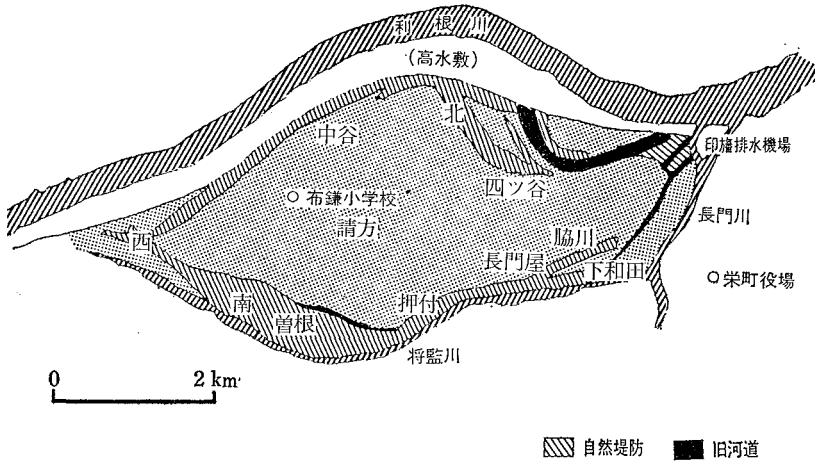


図3 栄町（布鎌地区）地形分類図

田、西新田、北新田、下和田の四か村が開かれ、寛文六年（一六六六）には、代官細田小兵衛時徳、近山五郎右衛門安高により代官見立新田として、中谷新田、横須賀新田、押砂新田、四ツ谷新田、酒直新田、脇川新田、長門屋新田、四カ村新田、大森新田、押付新田、上曾根新田、源五左衛門新田、太郎左衛門新田、太郎左衛門新田、利右衛門新田、七右衛門新田の十五か村が開かれ、これにより先の四村ともに、吉新田と呼ばれる十九か村が成立した。その後、布鎌の中心に位置する請方五か村の開発が、牢人島田是心によりなされ、布鎌新田二四か村が成立した。

最初に開発された四村は、ともに自然堤防とその周辺の微高地であり、次第に中央部の最も低湿地帯に開発が進んでいったこととなる。

しかし、自然堤防も十分でないため、結果として余り規則性のない村落景観を呈することとなっている。そのことは、伊藤⁽²²⁾が北川辺町について「この地域が自然堤防の発達が周辺部に比し、きわめて乏しいため、微高な吹上洲（河畔砂丘）や島状微高地に立地を余儀なくされる地形の制約から散村形式をとったものと考えられる。」としたこととも共通するものである。

(4) 水塚の構築

水塚形成の歴史的経緯については、これまで明らかにされていない。

ただ、この布鎌の場合については、完全な近世の新田村落であるため、寛文期以降の新田開発の進展にともなう村落形成の過程で築造されたものであることはたしかである。

布鎌の場合は、屋敷地については、水塚のような土盛りをすることが必要であったと同時に、耕作地についても堤水防止をする必要があった。

布鎌では、耕作地に小堤をめぐらしていたことが史料的に示されていて、それは「段々持堤」と呼ばれていた。これは、農道などにも使用され、堪水期間が長びいた場合には作物に多くの被害を及ぼしたので、近世を通じて「段々持堤」を切りくずす悪水事件が頻発した⁽²³⁾。

水塚の存在を史料的に明らかにするものとしては、次の史料がある⁽²⁴⁾。

乍恐追訴奉願上候 是ハ手賀辺江御検見ニ御越被遊候節差上可申願書ニ御座候事

一 印旛郡布鎌新田之儀者利根川中洲之嶋新田ニ御座候得者、開発之砌今只今迄皆畑場ニ有之、地面土墨故連々と滅込殊之外地窪ニ相成年々水損難遁候ニ付、無是非少々宛之畑堀揚、並ニ満水之節銘々百姓屋敷内ニ水揚塚築立候土取揚跡、此度殿様御見分被為遊御吟味之上右堀揚跡相改小前帳差上候

(中略)

乍恐以書付奉願上候是ハ南宿源右衛門処ニ而差上申候先達而被仰渡候私共村々堀揚畑跡敷、並ニ水揚塚土取跡歴然稻植付之場処、向後田成ニ可被仰付御吟味之趣御尤至極ニ奉承知候得共、布鎌新田之儀者四方利根川引き廻シ嶋新田故出水用水等之便無御座、纔ニ照統之節者決而植付不相成、□□(虫損)当処至而地低ニ付、利根川少々之増水ニ茂以樋閉降留□(虫損)以水腐仕、取実之儀稀ニ而、堀潰シ同断ニ御座候得共、畑場年々水損仕百姓可取続様無御座候間、毎村地窪程堀揚多ク畑外

殊之外相減難儀仕候処、

(中略)

一札之事

一 当新田之儀、開発ノ只今迄皆畑場ニ有之候得共、地面段々減込殊之外地窪ニ罷成、年々水損難儀候ニ付、無是非堀揚畑仕候
 処、此度水塚土取跡並堀揚跡敷之分、田方ニ御引直之儀を以畑土取跡敷委細相改、

(後略)

(明和二年八月、土取場跡地ニ付畑並年貢賦課願)

この史料は、明和二年(一七六五)のもので、支配の代官が水塚や畑の補修のため土取りした跡地を水田とみなし、課税しようとしたことに對する訴状である。布鎌新田は、その成立当初から土を掘り揚げ畑を築いた、水田のない畑だけの新田であった(25)。

この中に、「水揚塚」、「水塚」としてあらわれるのが、史料的に確認できる早い時期のものである。このことは、水塚の語源として「水揚塚」が想定されることを示唆するとともに、この時期から「水塚」を用いていたことに注目したい。

このようなことから、この周辺の水塚は地域の地形的条件等から、一八世紀の前半には築造されていたものと思われる。築造年代については、水塚の樹木の樹齢からおおよその年代を確定することも可能かもしれない。また、現地での古老への聞き取り調査などによれば、大正、昭和に入ってからの新造はなかったようで、この地域の水塚はほぼ一八〜一九世紀の産物といつてよい。

(5) 水塚の形態

水塚の形態について、佐藤ら⁽²⁶⁾は土盛りの型式と、その上の建物の種類から、次の三つの類型に分類した。

I 母屋や前庭の面よりも一段高く土盛りを施して、物置、倉を設けたもので、最も一般的な型式。

II 土盛りだけで建物を設けない型式。

III 母屋にのみ高い土盛りを施して、納屋や前庭のある面が、一段低くなっている型式。

これは、妥当な分類と思われる。ただ、このほかに例えば、

IV 屋敷地全体が、ほかの家の水塚の高さ程度に土盛りを施している型式。

V 旧河道の堤防上に屋敷地の一部があるため、水塚と同類型になっている型式。

といった場合もある。

こうした点では、今後利根川流域のより広い範囲での水防建築についての議論が是非とも必要である。水塚の概念規定についての共通認識が十分でないところで（例えば、IVの型式を水塚とするかどうかについては意見が分かれる）、議論や調査がなされているため、なかなか広い範囲を包括したデータが集約されないのである。

また、この周辺は新田地帯であるので、古墳等の低地遺跡はみとめられず、十三塚、富士塚などの近世以降の塚も検出されず、そうしたものが村落の中で共同的避難場所となった事例は確認できない。

この地域の水塚構築にあたっては、周囲から土を掘り上げたものであることは、前節で紹介した史料においても確認できたところであるが、そうした土取り跡は、池あるいは堀状の遺構としてのこっている。

こうしたものについて、佐藤⁽²⁷⁾は、埼玉県における「カマエボリ」（構え堀）という名称を採用し、それが洪水の際の水流が、宅地に激突する勢いを緩和する役割を果たしたものとしている。

この地域においても、こうした堀は同様の役割を果たしたものと考えられるが、「カマエボリ」といった名称は検出できず、「ミオ」（水たまりの意味）といった名称が付される程度である。

こうした堀は、水塚のすぐ背後にある場合のほか、屋敷地全体を環濠している場合、あるいは屋敷の南側にある場合など、さまざまであるが、特に南側の日当りのよいところにある場合には、農耕用の種ひたし用の池に転用ケースがある（ただし、この場合も地域呼称は確認できず）。

堀の位置は、当然屋敷地内の水塚の位置によるところが大きい。水塚は、北西隅のものが多く見られるが、そのほかにも南東、南西とさまざまであるが、それは特に川との位置関係による、洪水時の水勢によるものであろう。

水塚における植栽についても、佐藤⁽²⁹⁾が指摘しているところであるが、ケヤキ、エノキ、シイ、タケなどがほとんどの水塚に植えられていて屋敷林となり、これらが防風林としての役割を果たしているほか、こうした樹木が水制の機能も兼ねていて、建物や水塚自体の流失防止にも効果があつたようである。

栃木県内の水塚では、特に「セキショウ」という植物を植えたケースがあるというが⁽²⁹⁾、この地域ではそうした例は見当らない。

そのほか、この地域の水塚では石垣を組んだものが皆無である。北川辺町周辺でも少ないようであるが、このことは最近でも⁽³⁰⁾堤防決壊による水害に遇っている小貝川下流域などと比べると、その差は歴然としている⁽³¹⁾。これは、元来石材供給地を持たない房総半島の地域特性によることと⁽³²⁾、洪水の頻度によるものと思

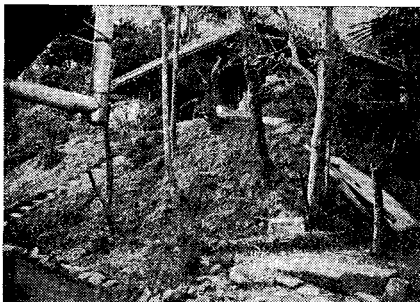
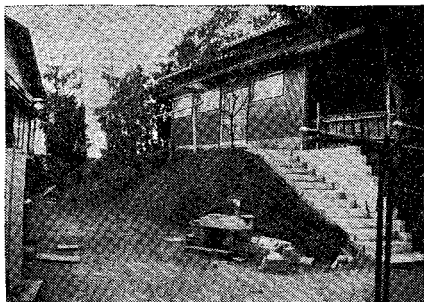
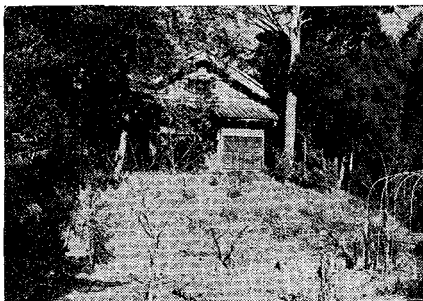


写真 水塚のいろいろ (No.9)



(No.32)



(No.50)

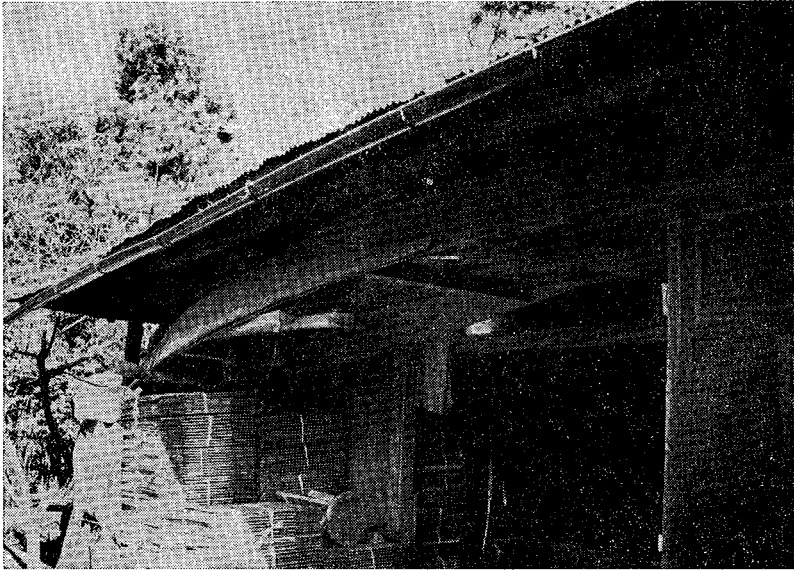


(No.51)

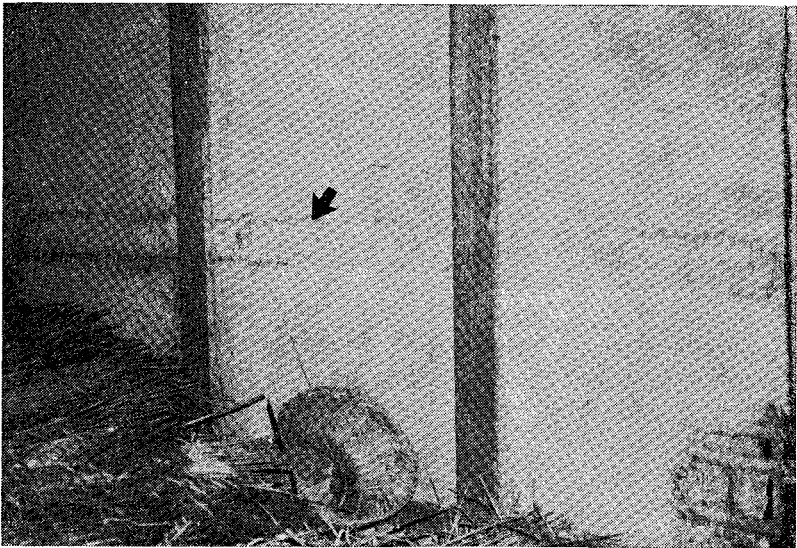


(No.56)

写真 水塚のいろいろ



揚舟の様子



洪水時の水のあと（矢印）

写真 水塚の内部

表 2 アンケート

「水害時の備えとして『水塚、揚舟、備蓄米』等が必要か?」についての回答

- (1) 必要ない
- (2) 大切に保存したい

水塚の有無	回 答	
あ る	(1)	11
	(2)	16
な い	(1)	34
	(2)	46

(6) 水塚をめぐる意識

この地域の水塚のうち、表1の保存状態欄に示した通り、完全な形で残っているものは、七二件の水塚のうち、四〇(五六%)で、ほぼ全体の半数強であり、特に近年になり、一部壊されている例が多くなってきている。これは、この地域での舟(農耕用および洪水時用の)の残存が、きわめて悪いことと通じる現象である。

こうした水塚減少の傾向の背景には、洪水等についての地域住民の住民意識の変化がある。

表2は、「水害時の備えとして、『水塚、揚舟、備蓄米』等が必要か」を、布鎌地区住民一三八戸にアンケート調査したものである。「(2)」の回答が高率を示していないことは、水塚をめぐる住民意識に変化があり、災害への危機感が希薄になっていることのあらわれであろう。

ただ、近年水塚を壊した例の中で、完全に壊すことなく、申し訳程度であるが、一部を残しておく例もあり、そうした場合は水塚が地域の歴史のなかで果たしてきた役割についての認識が、不十分ではあるがみとめられる。

このような住民意識の変化は、この地域の明治以降の洪水のあり方と密接にかかわっている。

この地域は、明治期には明治二九、四三年と堤防決壊にあっているが、それ

られる。特にこの地域については、利根川の堤防決壊がすくないことなどから、堰水型の洪水が多いことなどが指摘できる。

以降については利根川の堤防が決壊した経験をもっていない。昭和一〇、一三、一六年等の洪水はいわゆる内水氾濫である。

こうしたところに、前節でもふれた小貝川下流域などとの根本的な条件の相違があるわけで、舟の残存率の低さ、あるいは石垣築造がみとめられないことは、こうしたところにかかわってくるものである。

水害常習地における洪水、災害についての住民意識に変化がみとめられることは既に述べたが、例えば表2が示すように、水塚のみとめられない家（個々には検証していないが、よりあたらしく住民となった可能性が高い）においても、水塚への一定の理解がみとめられることは、水害常習地としての住民意識が、地域のなかで引き継がれていることを示すものであろう。

また、この布鎌地区においては、昭和五六年八月の台風八一一五号の際、利根川堤防で漏水箇所が数箇所発見され、警戒体制がとられた。

その際、住民の行動は比較的冷静であったが、危険な状況を告知するため町役場の広報車がマイクで「危険な状況なのでタイキしてください。」としらせたところ、「タイキ（待機）」を「タイヒ（退避）」つまり避難命令が出たとききまちがえた人がいたという。非常時にある住民のいらだった意識をかいまみると同時に、非常時の避難誘導に慎重が必要であることを考えさせられる。水害時の住民行動については、安八輪中を対象とした安藤清⁽³³⁾の報告がある。

四 むすびにかえて

利根川下流の水塚について、千葉県印旛郡栄町での事例を中心にもてきたが、最後に次の点を指摘しておきたい。

1 利根川流域には、支流河川も含め、水防建築として「水塚」が残存しているが、個々の地域にあってそのあり方は、地形的条件などから微妙な差がある。

2 したがって、個々の地域での洪水の具体的なあり方を検討するなかで、水塚を論じる必要がある。

3 と同時に、これまで利根川中流域（特に北川辺町周辺）のみとりあげられてきた利根川流域の水塚については、今後より広い範囲での分布を把握した上で議論すべきである。

4 そして、そのためには水塚についての概念規定をはじめ、積極的に共通認識をつくる努力が不可欠である。

昭和六一年八月、台風一〇号（八六）により小貝川はまたもや茨城県石下町で堤防が決壊し³⁴、周辺地域は大きな被害をだした。これだけ、水防体制が整備されてきているなかで、不可避的に災害が生起するという状況をみるにつけ、そして冠水域で舟が縦横に活躍しているニュース報道をみると、水塚や舟の存在は決して過去のものでないことを再認識した。

（後記） 佐藤基次郎先生、中山正民先生、小野寺淳氏からは貴重な御教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

注

（1）「洪水」と「水害」の用語については、大熊孝「水防と治水」（『月刊百科』二五九、一九八四）が示唆的である。本稿で

も氏の指摘通り、洪水が「河川に普段の何十倍から何百倍の水が流れる現象であり、自然的要因の強い現象」であるのに対し、「社会的要因の強い現象」が水害であるという理解に従いたい。つまり、自然災害はあくまで自然現象そのものでなく、「異常な自然現象」を素因として生ずる社会的価値の崩壊という、すぐれて社会的な現象であるということである。

(2) 「水塚」の名称(読み方)については、「みずか」のほか、「みずつか」「みずづか」などが認められるが、「みずか」が最も一般的であり、かつ調査対象地域の二三八戸を対象としたアンケートでも圧倒的であった。(アンケートの結果は、「みずか」九七、「みずづか」二二、「みずつか」二であった。)

(3) これまでの「利根川」に関する研究史をふりかえると、利根川が果たしてきた役割を、功と罪とそれぞれの面をストレートに強調してきたきらいがあるように思える。筆者は、利根川流域の地域の形成過程を、利根川とのかかわりの中で再構築してみる必要があると考えている。歴史をふまえた新しい「利根川流域地誌」の必要性を痛感している。そのためには、古文書だけでなく、在地のさまざまな史(資)料の発掘と、それらを地域の歴史叙述の素材として積極的にとり入れる作業がすすめられるべきである。

(4) 佐藤「利根川流域の水塚について——埼玉県北川辺村の調査を中心として——」(『新地理』一一一、一九六三)、同「水」と民家(山田安彦編著『地域の科学——水と地域のかかわり合い——』古今書院、一九八四)

(5) 伊藤「輪中地域以外にみられる輪中の事象」(安藤萬壽男編著『輪中——その展開と構造——』古今書院、一九七五)、伊藤・青木伸好『輪中』(学生社、一九七九)

(6) 中田「利根川流域の集落」(九学会連合『利根川——自然・文化・社会——』弘文堂、一九七二)

(7) 大熊「近世初頭の河川改修と浅間山噴火の影響」(URBAN KUBOTA)一九、一九八一)

(8) 横山「水害常習地における水塚と土地利用景観——埼玉県北川辺町の場合——」(『駿台史学』五四、一九八一)、同「自然と人間とが織りなした姿——景観点描——」(山崎不二夫編著『明日の利根川——ゆたかな清流への提言——』農山漁村文化協会、一九八六)

(9) 板倉町史編さん委員会『板倉町史別巻四——板倉町周辺低湿地の治水と利水』(一九八〇)

(10) 川上「印旛沼の地理学的考察」(『京都帝国大学文学部 地理論叢』第三輯、一九三四)

(11) 篠丸頼彦「下総の町や村(1)布鎌村の巻」(『印旛地方郷土研究』第一輯、一九五四)、千葉大学歴史同好会『利根川の輪中

に存した影響』(一九六九)、井上正敏『布鎌の歴史と民俗』(審書房、一九八〇)、取手市『取手市史 民家編』(取手市役所、一九八〇)、鈴木普二男『白井町の文化財ノート』(一九八四)など。また、地域学習を主体とする小学校三〜四年の千葉県内の社会科教材としては、早くから取り上げられていた。千葉県教育研究会編『すすむ千葉県』(千葉県教育会館文化事業部)および拙稿『水塚についての覚書——地域資料の教材化と博物館(その一)——』(『千葉県立房総風土記の丘年報』七、一九八四)参照。

- (12) 佐藤・佐々木・大羅『荒川流域における水塚』(『河川・湖沼の歴史地理——歴史地理学紀要二二』一九八〇)
- (13) 籠瀬『自然堤防』(古今書院、一九七五)
- (14) 佐倉市の印旛沼に接した青菅、先崎地区では、水塚と同形態のものが、水塚の名称をもたず、単に「土盛り」の名称で残っている。
- (15) 佐原市新島地区で、一、二水塚と同形態の土盛りを散見する程度である。
- (16) 小室『利根川下流地方についての若干の考察』(『地理の広場』一三、特集・利根川下流地域の研究、一九七二)
- (17) ちなみに、国税調査による昭和六〇年十月現在の柴町の人口増加率は四八・七%で全国第一位であった。
- (18) 「布鎌の請方、ゲエル(カエル)のションベン(小便)で水がたまるといふ言辭が、この地域の古老から聞かれることが多い。
- (19) 菊地『新田開発』改訂増補(古今書院、一九七七)
- (20) 須田『柴町史料集(一)』解説(柴町役場、一九七二)、同「幕末期下総布鎌新田の村方出入り」(『国史学』九三、一九七四)、同「近世前期下利根川流域における新田開発」(『市原地方史研究』九、一九七八)、そのほか、布鎌の新田を扱ったものに、田中文男「新田村における付き合い慣行の形成過程——下総国布鎌新田の場合——」(『普請研究』三、一九八三)がある。
- (21) 千葉県印旛郡役所、一九一三
- (22) 伊藤注(5) 論文
- (23) 須田注(20) 論文
- (24) 『柴町史料集(一)』所収、芳沢四郎家文書(同書布鎌関係史料、二六号)

- (25) 注(24)解説及び、竹内常行『続・稲作発展の基盤』(古今書院、一九八四)
- (26) 佐藤注(12)論文
- (27) 佐藤注(4)論文
- (28) 佐藤注(4)論文
- (29) 栃木県立博物館、柏村祐司氏の御教示による。柏村『佐野市史 民俗編』(一九七五)、同『小山市史 民俗編』(一九七八)、同『しもつけのくらしとすまい』(下野新聞社、一九八一)
- (30) 小貝川下流では、一九八一年八月、台風一〇号(八一)により、竜ヶ崎市地先の小貝川堤防が決壊している。
- (31) 小貝川下流の茨城県藤代町でも相当数の水塚が確認されているが、その中に大分石垣を組んだものがある。藤代町の水塚については、前藤代町史編さん委員会委員長、渡辺清氏に御教示いただくとともに、同氏の案内で数次の現地調査を行った。
- (32) 房総半島(千葉県)は、古来「山なし 石なし 川なし」といわれている。白井哲之「水と段丘、台地——下総台地の水と地形——」(山田安彦編著『地域の科学』古今書院、一九八四)によれば、この言葉が「千葉県全体の自然の様相、ひいては房総半島全体の自然の特性を簡潔に云い得たもの」であるとしている。
- また、石垣について、例えば栃木県の例では、明治期にはいり岩舟石の切りだしが盛んになる時期に、新たに石垣を組んだようである。
- (33) 安藤「輪中地域住民の水害知覚と対策採用行動」(『人文地理』三四—四、一九八二)
- (34) 茨城県石下町での小貝川堤防の決壊と、同明野町での大規模な内水氾濫などである。
- (補注) 本稿で用いたアンケート調査は、昭和五九年、栄町立布鎌小学校(塩田裕次校長、調査の時点の見学数一七八名、家庭数二三八戸)の協力により、その各家庭を対象に行ったものである。
- また、布鎌については、その地下水の問題と地域形成との関係を論じた拙稿「利根川と『水』——水塚についての覚書(その二)——」(『千葉史学』七、一九八六)、同「地域と水道——地域をみる一つの視点——」(『よつかど』(四街道市郷土史研究会誌)七、一九八六)がある。